

第4回 まちなか公共空間等における「芝生の造成・管理」に関する懇談会
議事要旨

日時:2019年11月29日(金)15:30~17:30

場所:中央合同庁舎3号館6階都市局議室

※ 事務局より、資料に基づき第3回懇談会の振り返りがあった後、ゲスト委員からの発表と、出席者間における意見交換が、以下のようになされた。

[芝生・みどりの更なる展開]

- グリーンインフラというキーワードから、空間をつなげる、人をつなげる芝生についてエビデンスを踏まえ、説明する。そのうえで、効果的に芝生を造成するために、新技術であるハイブリッド芝の適材適所での活用を提案する。
- インフラの改修・更新に合わせ、グリーンインフラとして、防災・減災、環境改善・修復、健康・ストレスマネジメントといった機能を発揮する芝生・みどりを展開していく考え方を投入していくべきである。
- 芝生の空間には様々な用途がある。「環境改善・修復、防災・減災」機能として、暑熱環境の緩和、ヒートアイランド対策、雨水浸透、延焼防止等にも可能性がある。また、避難路の確保や避難地そのものになる。「コミュニティ」として、交流・活気・居場所、イベント様々な活動・レクリエーションを受け入れる空間にもなり、治安、防犯の改善にもつながる可能性がある。
- グリーンインフラの中に、「公衆衛生」を位置付けた。グリーンインフラは、現状では土木的な部分の発展的な発想ではあるが、様々な機能を併せ持つことに意味があり、場合によっては、存在効用としての環境改善等に利用効用がどのように関係するのかは、非常に重要なテーマである。
- グリーンインフラの拡張概念として健康・ストレスマネジメント機能ももたらしめている。例えば、学校の校庭を芝生化することによって、保健室の利用回数が少なくなる、けがが少なくなるといった学校保健としての効果もみられている。あくまでも生活習慣を変えるきっかけとして、芝生が役に立っているということであるが、芝生空間があることで、健康対策につながる可能性がある。公衆衛生として、芝生・緑は、誰しもが予防的に健康活動に取り組める重要な観点である。
- 芝生空間をサポートする技術として、ハイブリッド芝があると考えている。人工芝にくらべると暑熱環境緩和効果もあり、けがも少ない。また、天然芝に比べると、ハイブリッド芝は、芝の痛みが少なく、回復力が高い。今後より技術的に改良しながら、様々な用途を受け入れることが大事である。

[意見交換]

- 緑、公園で遊ぶことの定量的な関係を示すことは重要である。ポイントは、国土交通省と厚生労働省の理論の接続が重要である。高齢化、健康、肥満対策がウォーカブルとつながり、政策に展開しやすい。人間の健康と都市が緑化されることに関する定量的な因果関係、定量データをガイドとして提示したほうがよい。
 - ガイドラインに健康に関するエビデンスが掲載されていれば、芝生空間の提案がしやすくなる。
 - 自治体と連携した例として、新潟県見附市では、筑波大学の久野教授が中心となって「健康幸（けんこう）都市宣言」をしている。
 - 緑をつくるための予算の考え方として、建設費用ではなく、健康費用が緑の建設に関わるというアプローチもある。
 - 海外の事例として、オーストラリア・メルボルン市では、「ヘルシーパーク・ヘルシーピープル（Healthy park, Healthy people）を掲げている。公園・福祉の取り組みが協働で進められている。
 - AIPH（国際園芸家協会）でも「グリーンシティ」がテーマになっている。都市の緑が、健康や医療費の削減につながるという発表が多くなっている。例えば、一街区内の街路樹が増えると、病気が減るという研究報告もされている。
 - 緑の機能については、昔から定性データとして示されているが、エビデンスを示して説得させるのは難しい。今回の報告でも、巻末に最新のエビデンスが掲載されていれば、各自治体の施策を進めるうえで、有用な資料となる。天然芝であることの意義のエビデンスとして、健康はもちろん、ヒートアイランド低減効果、雨水の流出抑制効果などを掲載してほしい。
- ※ ゲスト委員の発表への意見交換後、事務局より中間とりまとめ（案）について説明し、出席者間における意見交換が、以下のようになされた。

[中間とりまとめ（案）についての意見交換]

- 都心部の事例だけではなく、地方の事例も紹介いただきたい。
- 芝生広場の導入に向けて、イニシャルコスト、ランニングコスト、芝生のスペックを対応させ、自治体が芝生導入の効果を論理的に説明できる資料があったほうがよい。
- 一般的に使用されている芝草を使うと、どのような空間ができ、管理の程度によってどのくらいのコストがかかり、ウォーカブルな空間をつくるためにどのような影響が発生するのかまで、記載したほうがよい。「芝生型」「雑草型」「裸地型」別にコスト、維持管理の状況を一覧で示すとよい。
- 人工芝の良さは掲載したほうがよい。短期間での設置・利用、夏場の暑さなど課題はあ

るが、季節を選べば、瞬時に芝生が設置できる。芝生という議論ではなく、芝生の空間、芝生の広場があることによる効果を書いた方がよい。

- 芝生を単一の芝生として維持するか、緑の空間として維持するか。芝生を使って空間を維持するということにどれだけこだわるかを考える必要がある。
- 技術的な内容については、学会等の研究論文などを適宜参照するとよい。
- 情報が重複している。「ツカウ」「ソダテル」「ツナゲル」を明確に整理したほうがよい。
- 芝生に関して、欧米と日本の大きな違いは、国民一人当たりの芝生面積である。日本も全国で芝生地が増えれば、国民一人当たりの芝生面積も増えて、維持管理が成立する。
- 日本は、寒地型芝草、暖地型芝草の両方が生育できる環境に位置している。寒地型芝草と暖地型芝草の生え変わりをどのようにするか、オーバーシーディングをどうするか等、気候に合わせた管理と利用について、何か定めたほうがよい。そのための新しい技術として、ハイブリット芝がある。利用の手段に合わせて、芝生を選択するとよい。
- 在来植生の活用について記述が不足している。
- 芝生広場を持続的に使うためには、コーディネーターが必要である。
- 南池袋公園やURの事例は、グリーンコミュニティをつくる事例として整理したほうがよい。
- 神戸市の東遊園地におけるアーバンピクニックという芝生の社会実験が参考になる。
- 雑草が混ざっていてもきれいな芝生はある。そのような写真を掲載して、まちなか芝生をリードしていただきたい。
- CORE（コア）の「O（Opportunity：機会）」に、環境教育、虫や花と出会える場として、まちなか芝生を位置づけ、説明に加えたほうがよい。
- 自治体がつくりたい芝生広場の実現に向けて、適切なプランを提案できる造園技術者（専門家）の存在が必要である。ローコストのメンテナンスの提案、芝刈りロボットの無料貸し出し（デモンストレーション）などがあると良い。
- 民間の工夫の事例を紹介するとともに、緑化条例やまちづくり条例に緑化（芝生）の維持管理や体制づくりの確保の工夫がなされている自治体、民間誘導の事例があれば、掲載していただきたい。
- 設置する芝生広場は、その「性能要求水準」にあった作り方をしたほうがよい。例えば、中央部の刈高を低くし、周縁部を借り残した芝生地など。それぞれの街によって、芝生に求められる「性能要求水準」が変わり、それを明確に書き分けたほうがよい。
- 芝生のクオリティの話をするのであれば、スタジアムの基準が参考になる。
- CORE（コア）のキーワードに加えて、SHIBA（シバ・芝）を加えたい。S（エス）は Sustainable（サステナブル）、Step（ステップ）、H（エイチ）は Healthy（ヘルシー）、Health（ヘルス）。I（アイ）は In-touch（インタッチ）、B（ビー）は Beauty（ビューティー）、A（エー）は、Area（エリア）。健康で、安全なまちをつくるためには、芝生地をつくろう、なお、コアが良くなるというつながりはどうか。

- 防災の視点は今後重要となることから、芝生地に大型車、テントなどが設置された写真を掲載し、そうしたことに対応できる基盤があるとしたほうがよい。
- まちなかの既存の広場空間を芝生化、みどり化すると、さらに様々な機能が生まれてくると示したほうがよい。
- コーディネーターを導入している先進的な取り組みも紹介してほしい。
- グリーンインフラ、グリーンコミュニティの成立には、市民の協力が必要である。市民緑地認定制度のような、民間が供給した空間についても、公共の空間と同様に位置づけられ、公共空間と合わせて、緑地を増やすことが可能になった。民間に対して、緑の空間の創出を促していくことが大切である。

以上